Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2013, Vol. 3, 123-126

報告

2012年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

春日由美　宮内孝
古賀隆一　黒川久美
内田芳夫

はじめに

人間発達学部附属子育て支援センターでは学部が開設された2010年よりこれまで、子育てや子どもに関する相談業務を行う「子育て支援室」、運動が苦手な子どもを対象とした「チャレンジ運動教室」、ダンボールなどを使った工作を行う「あそびの教室」の３つの活動を継続して行ってきた（春日ら，2011；春日，2011；春日ら，2012；春日，2012)。また2010年には「わくわくおやこ村」(黒川，2011；春日ら，2011)、2012年には「三股町子育て応援フェスティバル」(春日ら，2012）という地域と連携した子育て支援の活動を行っている。「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「わくわくおやこ村」では、教員だけでなく学生もボランティアとして参加しており、保育士・幼稚園教論・小学校教論を目指す学生たちにとって、授業以外での体験的な学びにつながっている。また「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」の活動は３年目に入り、地域に根付いたものになりつつあると言えよう。本報告では2012年の「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動について報告する。

１．「子育て支援室」における相談業務

本活動は本センターが開設される以前の2009年10月から2010年３月まで「南九州大学子育て支援室」として行っていた相談業務を、2010年４月の本センター開設以降も継続して行っているものである。相談業務は本学部の心理学を専門とする教員（臨床心理士）１名で行い、週１日、予約制で行っている。これまでの相談内容としては、①子育てについて（子育てについて不安がある等)、②子ども自身の抱える問題について（人間関係が上手くできない、不登校等)、③親子関係について（自分と子どもと親世代との関係、子どもへの接し方等）などがある。現在広報をほとんど行っていないが、行政や子どもに関する機関から当支援室を紹介され、相談を申し込むケースも多くなっていることから、本活動が地域に認知されつつあると考えられる。その一方で、予約が詰まっていて新規の予約を受理できない時期も多い。また本年は担当者の出産に伴い、一時期相談業務を休むことになった。2012年の相談状況の統計的報告と今後の課題については別にまとめる（春日，2013)。

２．チャレンジ運動教室

⑴　ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、2010年８月より本学部の体育を専門とする教員１名が企画運営を行う「チャレンジ運動教室」を開催している。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっている。それぞれのねらいは、次の２つである。

①保護者：子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きのポイントについて理解したりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そ

うとする態度を育てる。

②子ども：「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思い切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

⑵　教室の概要

⒜参加者　幼児（５．６歳）とその保護者　61組、小学校１．２年生とその保護者　45組、計210名（保護者は幼児と小学校１、２年生で重複有）。

⒝実施回数　前期の部８回（5/27，6/2，6/9，6/23，6/30，7/7，7/14，7/21）、後期の部８回（10/6，10/14，11/3，11/17，11/24，12/2，12/15，12/22）の計16回。

⒞教室の内容　幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基礎的な動きを取り上げた。親子で道具を使って遊んだり、まねっこ遊びなどのゲームをしたりしながら、それぞれの動きの感じを身に付けるようにした。小学校の部は、３年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げた。親子でやさしい動きから難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身につくようにした。

⒟子ども教育学科学生の参加者　延べ170名。

本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ども支援地域活動」の一環として、参加した。教室開始１時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネージメントやつまずいている子どもへの支援を行わせた。教室終了時には、学生１人１人の反省や学びを話し合う事後指導を行った。学生にとっては、子どもにかかわりながら、子どもの発育発達の違いや、子どもとのコミュニケーションのとり方、そして運動指導法などの多くのことを体験的に学ぶ機会となった。

⑶　今後の課題

今後の課題として以下の３点が挙げられる。

一つ目は学生の参加希望が多く（１回平均８名程度が参加可能）対応できないこと、そして事前・事後指導の時間が不足しがちであることである。来年度は学生の学びの場としての本教室をさらに充実させるための手だてを検討することが必要である。二つ目は参加者募集、参加者決定・連絡、スポーツ保険加入手続き等の事務手続きの効率化をどのように図るかである。三つ目は今後予想される希望者の増加にどのように対応するかである。例えば、運動が苦手な子どもを対象としていることをもう少し強調するなどして、参加者を限定する手立てを検討することが今後必要である。

３．あそびの教室

地域の親子が参加できる活動として、2010年、2011年に引き続き「あそびの教室」第３回「動物や昆虫を作ってあそぼう」を企画し、2012年10月27日㈯に開催した。この「あそびの教室」は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子で遊ぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、遊びの楽しさ・大切さを体験してもらうこと、を目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生の学びにもつながることを目的としている。以下、第３回目の動物や昆虫のダンボールによる工作教室について報告する。

⑴　スタッフと準備

⒜スタッフ　人間発達学部の教員４名と学生７名が参加した。主な活動は美術を専門とする教員１名が中心となり、準備や当日の活動においてこの教員が学生にも指導を行った。この活動への学生の参加は「チャレンジ運動教室」同様、授業科目「子ども支援地域活動」のボランティアとしてみなされる。

⒝準備　準備期間は2012年６月から10月までのおよそ３か月間であった。教員と学生で、当日親やスタッフが見本としたり、子どもが遊べるような作品等を、授業の空き時間などに制作した。ダンボールと新聞広告の紙で船や魚、樹木、動物（キリン、馬、犬、豚）、昆虫（蟻、カブトムシ）等、約50個の作品が出来上がった。犬やキリンなどの特徴があって制作しやすい工作

を中心に、これまでになかった動く玩具として新たにキャスターを取り付け、遊びの範囲を広げる試みをした。また教員が広報、当日の参加者の傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付を行った。

⑵　当日の活動

活動日の前日（2012年10月26日）に教員と学生で会場となる大学体育館内にダンボールの船、樹木、動物、昆虫などの作品を搬入した。活動当日（2012年10月27日）は午前９時30分から12時の２時間30分、体育館の半分のスペースを使って実施した。参加者は幼児（３歳以上の未就学児）と小学生の親子10組、計24名であった。工作の内容は、あらかじめ学生と教員で作って準備したダンボールの工作素材を作品の骨格に使用し、その骨格に新聞広告の紙や古新聞を、２倍に薄めた接着用ボンドを使って貼っていく張り子に近い技法を用いた。制作方法について教員から説明を行い、学生ボランティアと教員が親子の工作を手伝った。幼児の場合は親が子どもの意見を聞きながら制作し、作品はそれぞれ持ち帰ってもらった。また制作の前後で子どもたちは教員と学生で制作しておいた船や樹木等で十分に遊び、そこに学生たちが関わった。

⑶　アンケートと今後の課題

活動後、郵送で保護者へアンケートの協力をお願いした。その結果、「楽しかった」「ためになった」「また『あそびの教室』に来たい」は８名中「はい」が７名であり、概ね好評であったと言えよう。「家に帰ってからもやってみようと思う」では８名中「はい」が５名、「いいえ」が２名、「どちらでもない」が１名であった。また「子どものことで、これまで気がつかなかった発見があった」では「はい」が３名、「いいえ」が３名、「どちらでもない」が２名であった。自由記述項目では、「幼児にもできる工作の企画を」、「子どもと一緒に行うことが目的ならば対象年齢に合わせた企画を」という記述や、「今回は小学生を対象とすべきだった」という記述があった。また「今後も続けてほしい」「創作意欲が増したようだ」「家でも作って楽しみたい」「家に帰って早速また作りました」等の意見もあった。今回の活動を通して、活動内容の課題、進行の方法などの問題点がいくつか明らかになった。今後も改善しながらよりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

おわりに

以上報告してきたように、「子育て支援室」、チャレンジ運動教室、あそびの教室という３つの取り組みは、人間発達学部附属子育て支援センターの活動の３本柱として、地域にも認知され、ほぼ定着してきたといえよう。この３本柱を軸にしながら、今日の子育てや地域の状況から見えてくる諸課題に応えていけるよう活動を更に豊かなものにしていきたい。

今後の課題を４点あげておきたい。①これまでのところ３本柱の活動いずれにおいても、遂行する上で一部教員の負担が大きいものになっている。円滑な実施のために、実務担当者を配置できないか、その可能性を追求したい。そうすることで、教員は活動の内容・質の一層の向上のために力を注ぐことができるといえる。②子育て支援センターの活動は学生にとって極めて貴重な学びの場である。チャレンジ運動教室における学生参加はそのことを実証している。更に、チャレンジ運動教室での学びが教育実習や保育実習に際しても大いに活かされていることが３年生の本格実習で確認された。そこで、支援センターの諸活動への学生の参画と、教育・保育実習や大学での授業やゼミ、あるいは夢かなⅡでの表現活動等とを有機的に関連させるしくみづくりを考えていきたい。③支援センタープレイルームに、地域の子育て中の親子が日常的に集える「子育てひろば」のような常設の場を開くことに向けて条件整備をすすめていきたい。トライアルとして、たとえば週１～２回程度、午前中オープンするといったところからスタートできないかと思う。そのためには、子育て支援に対応できるスタッフを配置する必要がある。常設の場ができれば、学生の参画も一層すすむと考えられる。④都城市・三股町地域にある４か所の子育て支援センターの自主的な連絡組織である「求10ネットワーク」の要請を受けて、今年度も本学を会場にしたスタッフの研修会及び親への子育て講演会の講師を教員（黒川）が引き受

けた。本学の支援センターの持ち味を生かしながら、他の地域の子育て支援センターとの連携のあり方を探っていきたい。

文献

春日由美・黒川久美・宮内孝 (2011). 2010年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告　南九州大学人間発達研究, 1,89-92.

春日由美 (2011). 2009年・2010年南九州大学における子育て支援としての子どもに関する相談業務報告　南九州大学人間発達研究, 1,93-95.

春日由美・黒川久美・宮内孝・古賀隆一・内田芳夫・矢口裕康・若宮邦彦 (2012). 2011年人間発達学部子育て支援センター活動報告　南九州大学人間発達研究, 2,215-219.

春日由美 (2012). 2011年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告　南九州大学人間発達研究, 2,220-222.

春日由美 (2013). 2012年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告　南九州大学人間発達研究, 3,119-121.

黒川久美 (2011).「わくわくおやこ村」に関する報告－地域との連携による子育て支援活動　南九州大学人間発達研究, 1,97-100.